張潔の『無字』とその批評をめぐって

秋　山　洋　子

I

張潔の『無字』は，2002年１月に出版された。全３部，80万字をこえる大長編である。中国新時期文学のさきがけとして文革直後の1970年代末に登場した張潔は，中国を代表する女性作家として，現在に至るまで話題作をつぎつぎに発表している。なかでも，『愛，忘れがたきもの』，『方舟』などの作品は，中国の社会における女性の生き難さを深くえぐり，中国フェミニズム文学の代表とみなされてきた。

80年代に旺盛に作品を発表していた張潔は，1991年に母を失って，翌92年『この世でいちばん愛してくれた人が逝った』を発表した。その後しばらく活動を休止しているようにみえたが，じつはその間，黙々と『無字』を書きつづけていたのである。この長編の末尾には，「一九八九――二〇〇一年九月二十八日　北京」と記されている。さらに，７行からなる詩のような後記が付され，「二〇〇一年秋　まもなく母逝去十周年を迎える時に」とある。この小説の筆を取ったのが，中国の知識人に大きな挫折感を与えた「天安門事件」の年であり，筆をおいたのが作者の母の逝去10周年であったと，書き記さずにはいられなかったところに，張潔にとってこの小説と苦闘した歳月の重さがおしはかられる[1)]。

『無字』は発表から３年後の2005年，長編小説に贈られる第６回茅盾文学賞を受賞した。1985年に『重い翼』で第２回の同賞を受賞した張潔は，初の再受賞者となった。

本論は，中国で発表された『無字』に対するいくつかの批評を紹介することを通して，この物語が中国でどのように評価されたかを分析するとともに，中国におけるフェミニズム批評のいまを一瞥することを意図している。

II

小説『無字』に対する批評を検討する前提として，まず物語を概観しよう。私事

になるが，私は『無字』が茅盾賞を受賞した2005年に在外研究で中国に滞在していた。現地の研究者たちに，現在注目されている女性作家の作品はと聞くと，『無字』をあげる人が多かったので手にとったのだが，在外研究という時間の余裕に恵まれていた時でなければ，この長くて重い物語を読みきることはできなかったかもしれない。

この小説は長いだけでなく，ヒロインの意識に沿って話が行きつ戻りつする複雑な構造になっている。それを歴史の流れに沿ってまとめなおすと，20世紀の初めの中国東北を出発点に，90年代の北京に至る四代の女たちの物語が浮かび上がってくる。とりわけ，四世代の中間にある葉蓮子（イエリエンズ）と呉為（ウ ウェイ）の母娘が，それぞれ愛した男によって傷つけられ，捨てられる経緯が，物語の中核をなしている。

母である葉蓮子は，張学良のひきいる東北軍の軍人顧秋水（グ チウシュイ）と結婚するが，満州国の成立によって東北軍は根拠地を失う。北京で所帯を持った夫婦には娘の呉為が生まれ，つかの間新婚らしい時をすごすが，北京が日本の占領下に入ると，顧秋水は旧東北軍の上官に従って新天地を求めて去ってゆく。置きざりにされた母と娘は，他家で女中同然の居候暮らしをする。「呉為がどんなに奴隷になることを避けようとしても，二歳のときから，彼女の背骨は曲がり始め，それ以後けっしてまっすぐにならなかった。」（第二部四章４，p. 213）

その後，顧秋水が香港にいることを知った母娘は，戦乱の中をたずねていくが，顧は現地の女性と同棲していた。仮住まいの部屋に妻妾同居を余儀なくされた状況の中で，顧は妻に暴力をふるい，幼い呉為もとばっちりを受ける。この暴力は，呉為にとっての原体験として描かれている。

> このとき以来，呉為は手に寸鉄も持たない反抗能力のない弱者への暴力を，人性の卑劣無恥の極端，極致であり，ひいては男性の極端，極致――彼らが人性に直面できない時だと見るようになった。
>
> とりわけ，顧秋水の股のあいだにあって，彼が跳びはねたり殴ったり蹴ったりするにつけ，クルクル，ブラブラする，赤色とも紫色ともいいがたい代物はいったい何なのだ。
>
> 呉為にはまったくわけがわからず，最後に自分で暴力と結論づけた――それが顧秋水の暴力といっしょに来るものならば，暴力の一部であるにちがいない。
>
> 後になって呉為が男との性愛をあんなにも重苦しく考えたのも無理ないことで，まず心に刻まれたこの上なく醜い形象に遮られ，それからやっと男との愛に踏み入

ることができたのだから。（第二部七章１，p. 319）

張潔は，呉為の体験を小説のエピソードにとどめず，続く地の文で「この世でどれだけの女がこんな経歴を持っているのだろう」と問いかける。そして，母に対する父の暴力が，幼い娘に暴力への恨みと同時に，暴力への迷信と崇拝をも植えつけたとつけ加える。

さらに，幼い呉為は，小学校の教師からも暴力を受ける。ひいきの生徒への試験問題漏洩を指摘された教師は，栄養不良で小柄な呉為を板切れで殴りつける。「父から受けた男性の暴力の経験が，まだ一人の男だけの問題だったとしても，趙先生の猛打は，男性の暴力についての全般的結論を彼女にもたらした。」（第一部七章１，p. 337）

幼いときに暴力を刻印された呉為は，長い物語の中でそれを背負って生きていく運命を担わされる。大人になって恋愛を体験するときも，彼女はそのトラウマから逃れられない。暴力の記憶が次の世代にまで被害を及ぼす状況を描くことが，この小説の底に流れるテーマのひとつであることがわかるだろう。

香港から戻った葉蓮子は必死で働いて娘を育て，呉為は大学に進学する。北京に残るための手段として北京戸籍のある同級生と結婚し，２人の娘を出産するが，下の娘は婚外子だったため，夫との間がこじれて離婚に至る。

おりあしく文化大革命が始まっていた時期，「私生児」（原文でも，差別をこめた言葉としてこの語が使われている）を産んだ呉為は「黒五類」に属する不良分子として住民大会で糾弾され，近所の人々にツバを吐きかけられ，職場の男たちの性的なからかいの対象となる。女三代が身を寄せ合って貧しさと周囲の冷たい目に耐えるなかで，呉為は小説を書いて投稿し，作家として認められる。

こうして，生活のうえではやっと落ち着いたところで，呉為は20歳も年上で妻子ある胡秉宸（フ ビンチェン）と恋におち，そこでまたもや男と女の長い物語が始まる。『無字』の物語の中心をなす呉為と胡秉宸との恋愛関係には，母の世代のような直接的な暴力はあまり登場しない。しかし胡秉宸は，前妻との離婚，呉為との結婚，そしてまたもや離婚と，ふたりの関係の節目ごとに呉為を欺き，責任を逃れ，暴言を吐き，性関係を強要し，呉為の献身を当然のこととして受けるなど，相手の心を深く傷つける態度をとり続ける。張潔の筆は，胡の利己的な言動を克明に暴くと同時に，傷つきながらも，胡との関係に依存し，そこから逃れられない呉為の言動をも執拗に描写し続ける。

呉為が発狂する場面から語りだされた物語は，百年の時空を行きつ戻りつしたあげく，精神病院での呉為の死によって幕を閉じる。暴力的で絶望的な愛の物語は，ヒロインの死という形でしか完結することができなかった。

III

『無字』が発表されてまもなく，総合評論誌『読書』に，王蒙による批評「極限の創作と無辺のリアリズム」が掲載された（王蒙，2002)。これは本格的な評論というよりはエッセイ風の短いものだが，『無字』という小説に対する違和感，さらに強くいえば嫌悪感を率直に表明しているという点で異色のものであった。王蒙といえば共産党の中央委員であり文化部長（大臣）や作家協会副主席などを歴任した中国文壇の権威であるから，その発言はそれなりの影響力を持っている。

王蒙は冒頭で，『無字』は作者が全身全霊をこめた画期的な作品であり，「比類なく率直で，比類なく誠実で，比類なく大胆な」極限の創作だと評価する。しかし，同時にこれは，作者の血と涙で満腔の恨みをぶちまけた小説，作者の憤懣と怒声が所を得た小説だとつけ加える。

若いときは激烈だった作家でも，多くは年をとれば恬淡になり，周囲の人や環境と和解してゆく。しかし中には，魯迅や張潔のように，老いてますます不寛容になり，恨みを抱き続ける者もいる。自分は友人として，張潔にもうすこし心穏やかになってほしいと思う。とはいえ，人々がみな穏やかになってしまう中で，このような議論を呼び，人を苛立たせたり不安にさせたり，ひいては狂気に追いやるような文学を，平穏な文学と比べてどちらが文学史上の価値があるかと問えば，答はいうまでもない……と王蒙はいう。

論評の最後でもまた，言葉をかえて同様の評価がくりかえされる。

> しかしながら，いかに一山二山の欠陥をあげつらっても，この本の非凡と独特，この本の力量，この本の一読にあたいする価値を否定するすべはない。それは火のように灼熱し，氷のように冷たく，剣のように鋭く，蛇のように纏いつく。(……)いかにこの本が粗野で気侭で天邪鬼であっても，多くの典雅で穏和な本に比べて華があり涙があり人生がある。(……）いかにその言語と知識が生硬であっても，独自の言語風格を持った本である。(王蒙，2002，pp.54-55)

このように，「しかし」，「いかに……ても」と逆接の修辞を重ねながら，王蒙はこの小説の持つ力を肯定する。そして，後世からふりかえれば『無字』の登場は2002年中国文壇をマークするものになるだろうと予測することでこの論評をしめくくっている。

論評の最初と最後に記されたこの高い評価は，その中間で展開される厳しい批判を和らげるための緩衝材というわけではない。王蒙が好悪の念を抑えて誠実にこの評価をしていることは文章自体から読みとることができる。しかしながら，この文章の重点が「一山二山の欠陥」を指摘することにおかれているのもまた明らかだ。

まず，王蒙が指摘するのは，ヒロインである呉為母娘に対する作者の思い入れが強すぎて，母娘と周囲の人々との関係が「一かゼロか」という単純な対比になってしまっているということだ。「作品全体が，呉為の感受，恨み，それに取り留めのない――時として天才的な，時として未熟な（失礼）――『思考』の上に成りたっている。私は時折，もし作中の他の人物が書く能力をもっていたら，彼らはどんな小説を書いただろうと妄想した。」（同上，p.49）

そのうえで，書くというのは権力の行使であり，作者はその権力の行使に責任を負わねばならないとする。書くことの権力性は，抽象的に論じれば限りなく大きなテーマとなるが，卑近な例では小説のモデル問題で争われる場合が多い。ただ，その場合は実在のモデルの側から訴えるのが一般の例で，作中の登場人物になりかわって作者の権力性を問うというのは珍しい。

王蒙は権力性の問題には深入りせず，問題をずらして問いなおす。「結局のところ，洗いざらい書くべきか，あるところで筆を控えるべきか，ということだ。（……）もし洗いざらい書くとなれば，プライバシーと尊厳，文章の徳性と文章の品格への配慮はなくなるのか。」（同上，p.49）

王蒙は，書く権力の行き過ぎた行使であり，品性を欠く描写の例として，妻の裸体に対して夫がその衰えを指摘し，ショックを受けた妻はそのあと夫との性関係を拒むようになるくだりをあげる（第一部第五章５）。このようなベッドの中での些事をあげつらうことを小説の品格にかかわるとしたうえで，性関係におけるヒロインの，そして作者の被害者意識が一方的だと指摘する。

> もしも愛情と結婚において女が男に多くを差し出さなければならなかったというなら，男は女のために，何も差し出さなかったのか？　自分がこのうえない恥辱をこうむったという結論は，分析の結果というよりは，とっくの昔から不倶戴天の仇

討ちの心を抱いていたからではないか。この種の反駁の非論理性は，年ごとに運動が繰り返される社会環境に身を置いてきた私たちの世代にとってはなじみのものだ。（同上，p.50）

王蒙の批判を読み進めると，彼が違和感，嫌悪感をいだくのは，ヒロイン＝作者の男性に対する被害者意識，とりわけ性愛にからまる場面であることがみえてくる。前節で要約したように，『無字』において繰り返し語られるテーマのひとつは，性と分かちがたく結びついた女性に対する暴力である。その執拗な語りに男性である王蒙の神経が逆撫でされたことは想像に難くない。では，女性が読む場合はどうなのだろう。私自身も王蒙の指摘を意識して上記の場面を読み返してみたが，前後の部分で二人の性的・心理的な関係の歴史がたどられているので，呉為の心の動きにさほど違和感なくついていくことができた。あるいはここに，読解におけるジェンダーの溝がはっきりと横たわっているのかもしれない。ただ，王蒙がヒロイン＝作者の男性に対する糾弾を，中国で繰り返されてきた政治運動における糾弾の方法と共通すると感じたということは，必ずしもそれに同意しないとしても，きちんと受け止めて考えるべきことであり，私自身の課題として残しておきたい。

王蒙はその一方で，この小説が，女と男の曲折した物語の背景として，中国百年の歴史を確かな筆で描ききっていると評価する。「あるいはヒロインは，彼女にとって限りない不満の対象である父や後に夫になる相手に対して感謝すべきかもしれない。彼らは彼女にこの百年来，少なくとも数十年来の中国で起きた大事に接し，多少なりとも理解するようにしむけ，彼女のとりとめない，時には天才的で時には無邪気な頭脳に，個人的なことだけでなく，国家の大事にかかわる機会を与えたのだから。」（同上，p.52）

この一文は，国家の大事を描ききったのが張潔の筆であることを承知のうえで，作者が形象したヒロインである呉為に，同じく作者が形象した男たちへの感謝を求めるという，奇妙にねじれた構造を持っている。国家の大事のために奔走し，挫折した男たちに対する王蒙の強い思い入れがここにある。さらに注目すべきことは，国家の大事と個人の小事には価値の差があるという王蒙の意識が，はっきり表れていることだ。このような公と私，大事と小事を分ける価値観に対して，「個人的なことは政治的だ」と対抗したのがフェミニズム批評であったことを考えれば，ここにもまたジェンダーの大きな溝があるということができそうだ。

王蒙に代表されるような男性からの批判に対して，張潔は「なぜ一部の男の人が

あんなに怒るのか理解できません。(……) 私は自分が正常だと思っているので，私を正常でないと思う人がいても気にならないし，反駁しようとも思いません。猿とキリンが対話できるでしょうか」と荒林との対話の中で軽くいなしている。(荒林・張潔，2005，p. 93)

さかのぼれば，女性学・フェミニズム批評は，男性作家の視点を一方的だとする女性の側の批判から始まった。中国においても，1980年代に話題を呼んだ張賢亮の自伝的小説『男の半分は女』に対して，著者の分身とみられる主人公が相手の女性を性の対象としてのみ捉えていると女性の側から批判があがったことがある。これは『無字』に対する王蒙の批判と，ちょうど裏表の関係だったといえるかもしれない。(秋山，1991)

また，若手の研究者董炳月は，自らを「男権批評」と揶揄的に規定しながら女性作家丁玲の描いた男性像の偏りを指摘し，それを通じて当時の女性作家がおかれた困難な立場を分析するという，興味深い試みをしている。(董炳月，1993)

Ⅳ

王蒙が本能的に不快に感じたのは，『無字』が一方的にヒロインである呉為母娘の視点から，彼女たちを被害者，父や夫たちを加害者として描いたことであった。董炳月の造語を借りるなら，作者のフェミニズム（女性主義／女権主義）に触発された男権主義批評といってもいい。では，王蒙の「男権主義批評」に対して，フェミニズム批評の側は『無字』をどうとらえているのだろうか。

中国の新時期文学とフェミニズム批評との関係は，中国独特のねじれをみせている。文化大革命終了の直後である70年代の終わりから，女性作家たちは旺盛な創作を開始し，その中にはフェミニズムの視点から評価すべき作品が多く書かれた。しかし，中国におけるフェミニズム批評は女性文学の開花に遅れて始まった。フェミニズム文学史の先駆とされる孟悦・戴錦華による『歴史の地表に浮かび出る』が婦女研究叢書の１冊として出版されたのは1989年のことである（偶然の一致ではあるが，『無字』が書き始められたのと同じ年であり，「天安門事件」の年でもある)。女性学という辺境から生まれたフェミニズム批評が文学研究・批評界で市民権を得るのは，さらに遅れて1995年に北京で開催された第４回国連世界女性会議を経てのことである。80年代新時期に登場した女性作家たちは，1920，30年代に登場した丁玲や蕭紅といった祖母の世代にあたる女性作家と同時に，フェミニズム批評によっ

て再発見，再定義されたのである（江上，1993，1996）。

なかでも，1982年に発表された張潔の『方舟』は，中国におけるフェミニズム文学として再発見された代表的な作品である。都市のアパートに身を寄せあって暮らす３人の女性を描いたこの中篇は，たとえ学歴があり専門職を持っていても，単身（離婚・別居を含む）であるということだけで女たちがどんな差別や嫌がらせにあうかを如実に描き出した。当時はまだ，セクシュアル・ハラスメントや女性に対する暴力という概念は，日本においてさえ明確に定義されていない時期だったが，具体的に描かれている内容は，中国社会における構造的な女性差別と女性に対する暴力であった。

冒頭に「おまえは不幸になるだろう，なぜなら女だから」という箴言をかかげ，「女たちに乾杯!」という言葉で結ばれるこの物語は，まず外国の女性たちに注目され，中国のフェミニズム文学として翻訳紹介された。しかし，1979年に発表された張潔の『愛，忘れがたきもの』が，生涯をかけたプラトニックな婚外の愛を胸に秘めたまま逝ったヒロインをめぐって，婚外の愛の是非について，いまから省みればナイーブな熱い論争を引きおこしたのとは対照的に，『方舟』による女性差別の告発は黙殺された。前述の『歴史の地表に浮かび出る』とおなじ婦女研究叢書の1冊である新時期女性文学論『遅れてきた潮流』は，『方舟』を「新時期の最初の10年でもっとも激烈な女性小説」と評価したうえで，発表当時の情況を次のように語っている。

> 『方舟』が殴り殺されなかったのは，まさに僥倖だった。1982年の前後２,３年，まだ人は階級矛盾という観念になじんでおり，『方舟』が提起したジェンダーの矛盾は多くの人になじみがなかったので，さわれば火傷をする，捉えようのない本だが捨てるわけにもいかない，調子が低い，観点が偏っている，などという感想にとどまった。当時の張潔は売れっ子で，４,５編の作品が国家の賞を受賞したが，重要な『方舟』だけは冷遇された。（楽鑠，1989，p. 117）

張潔の多彩な作品世界の中で，『無字』は女性への暴力というテーマにおいて，明らかに『方舟』の系譜をひいている。ただ，中篇である『方舟』がアパートに同居する３人の日常に時間と空間とを限定したのに対して，大長編である『無字』のほうは，百年に近い現代史を背景に四代にわたる女たちの運命をたどり，とりわけ葉蓮子と呉為の母娘の受けた暴力の被害を委曲をつくして描ききっているという大

きな違いはもちろんある。

『無字』が発表されて以来，多くの批評が書かれており，なかでもフェミニズム批評を標榜するものは多い。じっさいに，『無字』は女性に対する暴力，母娘の絆[2]など，フェミニズム的な読みを誘いやすいテキストである。また，『方舟』が発表された80年代とは対照的に，現在はフェミニズム批評がむしろ流行で，「女性主義」という文字が大学の紀要論文などに氾濫している傾向も見うけられる。（劉棟，2007，呉淑芳，高修志，2008）

そのなかで，『無字』について最も精力的に論評をしているのは，雑誌『中国女性主義』の編集者であり，中国においてフェミニストであると公言している数少ない批評家・研究者の一人である荒林である[3]。

荒林は，王蒙が寄稿した同じ『読書』に，「再び『無字』から話そう」を発表した。王蒙を意識したこの文章で,彼女は『無字』を中国女性の物語であると同時に，中国男性の物語でもあると読み解いている。

> 張潔の『無字』は中国女性の物語を述べているだけではなく，中国男性の物語をも述べている。ただ，二つの物語は噛み合わず，両者をつらぬく赤い愛の糸は存在しない。男と女は向き合って共に歩もうとするが，予想外の危機に直面したため，男は自分のことで手一杯になり，女は子供という荷までも負った。事態は終わりを告げることなく，恐慌をきたした男たちは，切実に女を求めていたにもかかわらず，女が何を体験し何を考えているか知ろうとはしなかった。女は自分にしかわからぬ痛みを体験し，当然ながら理解と愛に飢えていた。女は強く深く愛を伝えたが，男には聞こえなかった。彼はとても疲れていたのだ。彼の体験を知っているのは彼だけだった。彼は歴史を書きたいと思った。女は独り言をいった。男もそうした。彼らには共通の体験がなかった。共通の体験なしに，共通の言語を持つことができるだろうか?（荒林，2004，p. 111）

このように，荒林は『無字』を，女の物語としてだけではなく，女と男の物語として読み解こうとする。王蒙が一方的な「女の物語」として拒絶したテキストを，荒林は共感を持って受け入れつつも，そこからはじき出された「男の物語」をも読み取ろうとする。そこから彼女が読み取るのは，歴史の激動に翻弄され，自己の志を貫徹することもできなければ，妻子への責任を果たすこともできなかった「大男子主義」者たちの挫折である。

大男子主義は『無字』の中では，曹禺の『雷雨』や『原野』に表れたように力にあふれ独断的で非情ではない。『無字』に登場する男たちはみな，かつてなかったほど無責任で，疲弊し，場当たり的で無能である。おそらくこれこそが真の中国式の女性の経験の表現であり，同時に中国式の男性の経験の表現なのかもしれない。(荒林，同上)

このように読み直してみると，張潔の筆は，登場する男たちの暴力性や傲岸さを徹底的に暴きながらも，軍人として，革命家としては有能で果敢であり，歴史の中で自己の役割を果たそうとしながら挫折した生涯を丹念に跡付けていることがわかる。愛における男たちの酷薄さと，政治的行動における果敢さとは，順接でも逆接でもなく，淡々と併記されている。ヒロインの呉為についてもまた，王蒙が「時として天才的，時として未熟」と評したその思考の道筋は，まさにそのような読みが成り立つだけの距離をおいて描かれている。そこに，『無字』が『方舟』のひとつの発展でありながら，単なる量的，時間的な拡大ではなく，はるかに複雑な内的発展をとげていることが示されている。そして，それを解読する荒林に，女の被害意識にのみ引きずられるのではない，中国におけるフェミニズム批評の成熟を見ることができる。

V

『無字』に対する批評としては，王蒙のような反論を含めたフェミニズムの視点からのもののほかに，歴史小説として評価するものも見られる。たとえば張学敏は，『無字』においては「過去には意識的無意識的になおざりにされたもの」，「変動激しい革命中のあいまいなままの細部」が問い直されており，政治や倫理における二項対立を脱した多角的な視点からの思索がなされていると評価する。(張学敏，2008)

張は婉曲な表現を使っているが，言わんとするのは『無字』の中に従来の共産党お墨付きの革命史に登場しなかった事実やその解釈が含まれているということだ。たとえば，胡秉宸の延安時代のエピソードとして，「延安搶救運動」が登場する。これは，日中戦争当時の共産党解放区における反革命批判・摘発運動で，革命の聖地延安を目指してやってきた多くの青年がこの運動に巻き込まれ，反革命・スパイの疑いで粛清された。旧家の出身で学生だった胡秉宸は，用心深く来歴を隠したた

めに嫌疑を逃れたが，正直に報告した友人は犠牲になった。（井上，1999）

延安搶救運動は毛沢東が発動したために，いまだ政治的にはデリケートな問題である。しかし，張潔がこの問題を取り上げた意味は，単に政治のタブーに踏み込んだということではなく，その体験を胡秉宸の人間を形成した契機として描いていることである。保身，虚栄，横暴など呉為との恋愛に影を落とす彼の欠点の数々は，呉為が惹かれた知識や，彼女に対する情熱とあわせて，共産党員であるにもかかわらず，ではなく，共産党員であることと一体化した彼の人格として捉えられている。最近の中国の批評では，フェミニズムと並んで脱構築（解構（ジェゴウ））という語も流行しているが，『無字』の歴史叙述がきわだっているとすれば，革命の正史を脱構築したにとどまらず，革命の闘士＝共産党員像を脱構築したところにあるといえるだろう。

さらに，革命後の社会で，呉為と恋に落ちた胡秉宸が離婚騒ぎを起こすくだりでは，妻の延安時代の同志たちによる「結婚防衛団」の活躍ぶりが描かれる。それは戯画化されているが，中国社会の中に深く根を張った党員のつながり（関係（グワンシ））という網の目が裏の権力機構を形成して，そこから疎外された存在，この場合は呉為をいかに傷つけるかがリアルに示されている。同志たちが胡秉宸の妻に加担したのは，「歴史が彼らを忘れようとしているだけでなく，この時代も彼らを忘れようとしていた」（第三部第六章３，p. 416）ことへの焦燥感によるものだったとされている。

1934年生まれの王蒙は，十代のころ共産党の地下活動に加わった経歴を持つという。その後官僚主義を批判する作品を発表して右派として労働改造を受けるという体験を経ているが，それでも革命運動にかかわった男たちをあまりにも卑小に描く張潔にいらだちを禁じえなかったのかもしれない。顧秋水や胡秉宸の歴史とのかかわりを彼らの視点から描いたならば，別な「男の物語」が成立しただろうというのは，王蒙の素直な感慨なのだろう[4)]。

しかし，大きな歴史に正面から挑むのではなく，それにかかわった個々の人間の卑小さを積み重ねることによって脱構築する『無字』の手法は，意識的に選ばれたものであり，王蒙が示唆するように別の視点からの歴史を書き損なったわけではない。あるいは，フェミニズムの方法と歴史批判という二つの方法を二元的に並立したのでもない。これは，大文字で書かれるべき革命の歴史と，個々の男女のあいだで起こる性愛と暴力の絡みあいという二つのこと，フェミニズムの用語を使うなら「政治的なこと」と「個人的なこと」とを同じ次元で併記していくことによって，同時に解体していこうという戦略のもとに選ばれた手法なのである。

こうして，解体された物語は，そのまま読者の前にさらされる。「80万言の長編『無

字』は，男女二人の伝記の書き手である主人公の別々の死によって，細切れにされた時代の細切れの伝記として提示される。すべては頭からから始めなければならず，死の否定は最大の新生の呼びかけをはらんでいる。」（荒林，2006，p. 8）

張潔は荒林との対談で，長編を書く体力のあるうちにと，『無字』に続く長編を執筆中だと語っている。それは荒林が示唆するような新生の物語になるのだろうか。

＊本稿は，2006，2007年度教養文化研究所共同研究助成を受けた「中国社会における恋愛」（秋山洋子・廣野行雄・前山加奈子）の研究成果の一部である。

引用・参考文献

秋山洋子「80年代中国文学に見る性と愛」『季刊中国研究』第19号，1991年

井上久士「延安搶救運動について」『駿河台大学論叢』第19号，1999年

董炳月〈男権与丁玲早期小説創作〉《中国現代文学叢刊》1993年第４期（田畑佐和子訳「男権と丁玲の初期小説創作」『中国研究月報』1993年11月号）

荒林〈再従《無字》説開〉，《読書》，2004年第11期

荒林（主持人）〈文本内外的闡釈――関於張潔及《無字》的討論〉《南京師範大学文学院報》2004年12月，No. 4

荒林〈重構自我与歴史：1995年以後中国女性主義写作的詩学貢献――論《無字》，《長恨歌》，《婦女閑聊録》〉《文芸研究》2006年５期

荒林・張潔〈存在与性別，写作与超越――張潔訪談録〉《文芸争鳴》2005年５期

孟悦・戴錦華《浮出歴史地表》，河南人民出版社，1989年

劉棟〈近年張潔研究述評（1995-2005）〉《蘇州大学学報》35巻１号，2007年６期

王蒙〈極限写作与無辺的現実主義〉，《読書》，2002年第６期

呉淑芳・高修志〈近十年張潔研究述評〉《安徽文学》2008年３期

楽鑠《遅到的潮流》，河南人民出版社，1989年

張学敏〈被顛覆的歴史与沉重的人性――《無字》的多角度思考〉《新学術》2008年１期

張潔《無字》（全三巻），北京十月文芸出版社，2002年

註

１）ただし，『無字』を書き始めた1989年は米国に滞在していて，執筆の動機と天安門事件と直接のかかわりはなかったと語っている。（荒林・張潔，2005）

２）母と娘の絆も，フェミニズムの立場から『無字』を論ずる場合の大きなテーマであり，

荒林も論じているが，ここでは紙数の関係で触れないことにする。

3）中国では，フェミニズム＝女権主義／女性主義という語に対して，左右両側からの反発が根強く，張潔をはじめフェミニズム批評から高く評価される女性作家も，自らフェミニストを名乗ることはほとんどない。中国女性学の提唱者である李小江なども，フェミニズムを西欧由来の思想と定義しており，そのため自らフェミニストとは称していない。

4）王蒙は張潔と交友があり，彼女の母の死に際しては，親身になって世話をしている（張潔『この世でいちばん愛してくれた人が逝った』）。したがって，『無字』の男性形象に対する批判の背後には，モデルとされた人物に心当たりがあり，そのため納得できない思いがあることも考えられる。しかし，彼自身が言及していない以上，本論ではそれ以上の詮索は控え，張潔の評伝研究者に委ねることにする。